

「訪ウズベキスタン現地事情視察団」概要報告

2017年3月
日本・東京商工会議所

1. 訪問先： ウズベキスタン共和国 タシケント、サマルカンド
2. 日程： 平成29年2月27日（月）～3月4日（土）
3. 目的： ウズベキスタンの経済情勢を把握するため現地市場視察を行うとともに、同国の労働者の技能の実情を視察する。
4. 参加者： 小池隆彦団長をはじめ9名

5. 全体概要：

日本・東京商工会議所は、2月27日（月）から3月4日（土）まで、東京商工会議所の小池隆彦議員（スキヤネット㈱社長）を団長とする現地事情視察団を、中央アジア・ウズベキスタンのタシケントとサマルカンドに派遣、9名が参加した。

タシケントでは、アジズ・アブドゥハキーモフ労働大臣、アリシェール・シャイーホフ・ウズベキスタン商工会議所会頭、アンバール・シャラポフ・ウズベキスタン国家観光開発委員会委員長、伊藤伸彰駐ウズベキスタン日本大使への表敬訪問に加え、労働省対外労働移民庁の研修施設や繊維工場、公営アパートの建設現場の視察を実施した。

サマルカンドでは、伊藤忠商事及びいすゞが出資するバス・トラック製造企業サム・オート社の工場や、労働省の職業訓練校などを視察した。

今回の訪問は、一橋大学に留学経験のあるアブドゥハキーモフ労働大臣の要請により実施した。同国は、ロシアやカザフスタン、韓国などに多くの労働者を派遣しており、同大臣は同国の雇用確保のため、技能実習制度等を活用した労働者の日本への派遣を希望しており、同省の手配により、職業訓練校や国外に派遣する労働者の研修施設などを視察した。



サマルカンドのシェドル・メドレセ



日本人抑留者が建設したナボイ劇場は両国友好の証



ウズベキスタンの伝統料理

の派遣を希望しており、同省の手配により、職業訓練校や国外に派遣する労働者の研修施設などを視察した。

6. 主な活動：

タシケント・サマルカンド

①表敬訪問

- 1) アジズ・アブドゥハキーモフ労働大臣への表敬訪問（2月28日（火））
- 2) アンバル・シャラポフ・ウズベキスタン国家観光開発委員会委員長（3月3日（金））
- 3) ダダハノバ・ナジーラ・ウズベキスタン商工会議所副会頭への表敬訪問（2月28日（火））
- 4) 伊藤伸彰駐ウズベキスタン日本大使主催ブリーフィング兼昼食会（2月28日（火））
 - 1) ～ 3) は伊藤大使も同席

②視察

- 1) 労働省対外労働移民庁ならびに同庁対外労働者研修施設（2月28日（火））
- 2) 日本向け技能実習生訓練センター予定地（2月28日（火））
- 3) ウズテックス社（紡績工場）（3月3日（金））
- 4) サム・オート社（伊藤忠商事・いすゞ合弁のバス・トラック工場）（3月1日（水））
- 5) サマルカンド職業訓練学校（3月2日（木））
- 6) サマルカンド市内公営分譲アパート建設現場（3月2日（木））

③夕食会

ウズベキスタン労働省主催タンジーラ・カマーロフ副首相・アブドゥハキーモフ労働大臣・シャイーホフ・ウズベキスタン商工会議所会頭出席の夕食会への参加（2月28日（火））

伊藤大使との懇談以外の全行程にナバロフ対外労働移民庁長官が同行した



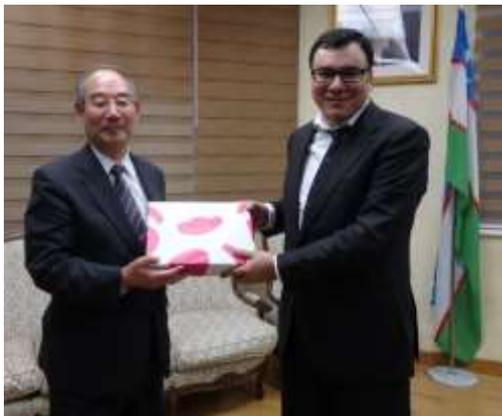
挨拶するタンジーラ・カマーロフ副首相

7. 結果概要：

(1) 表敬訪問

①アジズ・アブドゥハキーモフ労働大臣への表敬訪問（2月28日（火））

アブドゥハキーモフ労働大臣は、「われわれは労働者派遣に力を入れており、皆さんにはこれまで知られていなかったウズベキスタンの労働者の技能の高さについて日本で伝え、次のステップにつないでもらいたい」と述べ、日本での技能実習生の受け入れについて強い期待を表明した。また、同大臣は、同国では毎年53万人が職業高校を卒業し人材の宝庫であることや、東南アジア諸国のように投資誘致に力を入れること、エネルギーシユなミルジヨーエフ新大統領のもと、為替問題や手続きの簡素化などに取り組む経済改革を近いうちに進めることを紹介した。



アブドゥハキーモフ労働大臣と小池団長（左）

さらに、同国労働者の国外への派遣について、これまでは、韓国がメインであったがこれからは、ポーランド、オマーン、アラブ首長国連邦、マレーシアなどに派遣する計画があることを明らかにした。

小池団長は、視察団の受け入れについて感謝の意を

述べるとともに、帰国後に同国事情の会員企業への周知について協力することを表明した。

②アンバール・シャラポフ・ウズベキスタン国家観光開発委員会委員長（3月3日（金））

シャラポフ委員長は、国家観光開発委員会は、ミルジョーフ大統領が就任後に大統領令で改組しており、同大統領が経済的な方針として観光に力を入れることを打ち出したことを明らかにした。



伊藤大使（右から4人目）同席のもと
シャラポフ国家観光開発委員長（左）と懇談

また、同国の観光資源の数が世界9位で7千5百か所の歴史的観光地があり、そのうち210か所はユネスコへの登録がなされていると紹介。「今後は、①歴史研究、②エコツーリズム、③食べ歩きの旅に力を入れていく」と述べ、その中でも宗教観光に力を入れることを明らかにした。同国には、多数のイスラム教遺跡があり、マレーシア、中国、トルコなどからの観光客を期待している」と語り、仏教遺跡については、「スルハングリア州で25年間調査・研究を続けていた加藤九祚（きゅうぞう）先生が昨年9月に亡くなったので、大統領令でこの偉業を称え、記念館をテルメズの中心地に国の資金で建設する」と述べ、シルクロードのブランドを生かした観光PRを進めていきたいと力説した。

小池委員長は、「今回初めて訪問したが、私の周囲にはウズベキスタンに来たことがある人はおらず、国名の『スタン』から危険な国ではないかと思われる。実際に来てみると親切な人ばかりで、とても安全であると実感した」と述べ、帰国後に同国のPRに努めることを約束した。

また、同国の観光資源の数が世界9位で7千5百か所の歴史的観光地があり、そのうち210か所はユネスコへの登録がなされていると紹介。「今後は、①歴史研究、②エコツーリズム、③食べ歩きの旅に力を入れていく」と述べ、その中でも宗教観光に力を入れることを明らかにした。同国には、多数のイスラム教遺跡があり、マレーシア、中国、トルコなどからの観光客を期待している」と語り、仏教遺跡については、「スルハングリア州で25年間調査・研究を続けていた加藤九祚（きゅうぞう）先生が昨年9月に亡くなったので、大統領令でこの偉業を称え、記念館をテルメズの中心地に国の資金で建設する」と述べ、シルクロードのブランドを生かした観光PRを進めていきたいと力説した。



観光資源も豊富



ダダハノバ副会頭（左）は日本との関係強化を要請

③ダダハノバ・ナジーラ・ウズベキスタン商工会議所副会頭への表敬訪問（2月28日（火））

ダダハノバ副会頭は、ウズベキスタン商工会議所が日本大使館やJICA、ジェトロと積極的に交流し、両国企業の合弁や日本企業の同国での代理店づくりなどで関係を深めたいと要請した。特に、日本はITや医療、薬学などの技術が発展していると指摘し、これらの分野での協力を求めた。また、新大統領の経済政策の方針で海外企業との交流を深めていくことが表明されていると述べ、合弁のための資金が借りられるファンドができたことや経済特区が3カ所から7カ所に増えたことなどを紹介し、同国への投資を呼びかけた。

同副会頭は、同国が競争できる分野として農業分野を挙げ、日本で開催される食品展示会への参加を表明、コメや野菜の日本市場への参入の可能性につ



シャイホフ会頭(中央)と視察団一行

いて尋ねるとともに日本の農業機械への関心を示した。また、同所の日本代理事務所となりうる企業の紹介依頼をするとともに、同所と日商との間で協力覚書（MOU）を結び関係を強化したいとの意向を示した。

同所のシャイホフ会頭とは、同日の夕食会で懇談。同会頭は1998年から2001年まで駐日大使を務めており、日本での勤務歴がある商工会議所会頭として、日本への期待と関心の高さを表明した。

④伊藤伸彰駐ウズベキスタン日本大使主催ブリーフィング兼昼食会（2月28日（火））

伊藤伸彰駐ウズベキスタン日本大使から大使公邸にてウズベキスタンの政治・経済情勢についてブリーフィングを受けた。特に、昨年9月にカリモフ大統領が逝去され、12月に実施された大統領選挙を経てミルジョーエフ新大統領が就任した後の情勢などについて、また、ウズベキスタンにおける雇用・労働問題などについて詳細な説明を受けた。

（2）視察

①労働省対外労働移民庁ならびに同庁対外労働者研修施設（2月28日（火））

対外労働移民庁の本部を訪問し、ウルグベック・ナバロフ対外労働移民庁長官から説明を受けた。同庁は、地方に5か所の支部を持ち、事務所内に研修施設を併設する。これまでに韓国、ロシア、アメリカ、中東向けに労働者を派遣しており、現在、同施設では韓国・ロシア・ポーランドに派遣される労働者の直前研修を派遣先の要請に基づき実施している。今後、同様の研修を日本向けの労働者に対して行う予定。同庁は、ウズベキスタンで働く外国人に対し許可を出しており、その数は月3千人に上る。同庁は、同国の法律で海外に労働者を派遣する唯一の送り出し機関と定められている。

②日本向け技能実習生訓練センター予定地（2月28日（火））

タシケント市内に対外労働移民庁が建設する日本向けの技能実習生の研修施設の建設予定地を視察。今年6月に授業開始を目指す。特定の国向けの施設は、日本向けが初となる。同時に100人の派遣予定者が日本の言葉や文化、伝統、生活風習などを学べる施設になる。

③ウズテックス・タシケント社（紡績工場）（3月3日（金））

ユルダシェフ・バクラムベコビッチ社長が応対。ウズテックス社はウズベキスタン国内に5か所のグループ企業を持ち、紡績からシャツなどの縫製品までを手掛ける。タシケントでは、綿花から糸を作る工程を担当している。2haの工場では、スイスのRIETER（レイタ）や日本の村田機械の機械を使い、年間7200トンの綿花を使用して6500トンの糸を製造している。主にロシア、トルコ、中国に輸出をしており、日本にも輸出をしている。1日6時間の4交代、6勤2休で300人が働く。



ウズテックス社では日本製紡績機が活躍する

④サム・オート社（伊藤忠商事・いすゞ出資のバス・トラック工場）（3月1日（水））

ガニエフ副社長とコビロフ技術部副部長が対応。中型のバスとトラックを製造している同社は、サマルカンドに本社・工場があり、タシケントに財務・営業・マーケティングを担当する支社がある。ウズベキスタン国内に15の販売店を持ち、整備などのサービスも提供している。国外では、カザフスタン、トルクメニスタン、ロシアにも販売網を有する。1999年にトルコとの合弁で出来た会社だが、2006年にいすゞと伊藤忠商事にパートナーを変え、いすゞ製品を製造するようになった。製品の10%はカザフスタン、トルクメニスタン、キルギス、アゼルバイジャン、アフガニスタン、トルコ、ロシアに輸出している。受注生産であり、受注後240日で出荷している。同国では、大型のバスやトラックはMAN社、中型がいすゞ製と棲み分けが出来ている。同社の製品はロシア製や中国製と比べても品質が高く、輸出先でも競争が出来ている。シャシーとエンジンを日本から輸入しており、ボディなどは鉄をロシアから輸入し国産で対応している。いすゞで決めた基準の製造機械を使っており、8割がドイツ製、15%がイタリア製、残り5%がトルコとイギリス製である。



乗用車はGM、バスはサム・オート社製が走る

⑤サマルカンド職業訓練学校（3月2日（木））

タシケントビッチ校長が対応。同校は、韓国の無償資金援助により2016年10月に開校した。1)自動車整備、2)溶接・金属加工、3)電気、4)IT（事務職・技術者）の4分野に分かれており、高校卒業後に10カ月間（6カ月は同校内・4カ月は企業にて実習）



職業訓練学校は無料

学ぶことができる。

2月と8月の年2回、各60人×4コースの240人が入学し、年間で480人が学ぶ。語学の授業もあり、英語・韓国語・日本語の3か国語を教えている。

同校の開校にあたり、12人の教師が2か月間韓国で実習。韓国語の教材をウズベク語に翻訳し提供している。

⑥サマルカンド市内公営分譲アパート建設現場（3月2日（木））

サマルカンド市内の都市計画省が設計し分譲するアパートの建設現場を視察した。1棟45戸のアパートを15棟建設する国のプロジェクト。工事費は1㎡約200万スム（約7万円）で安く抑え、若い世代が市内に住めるように計画されている。広さは一戸50㎡～63㎡。



事務職用のパソコンコース

働いているのは地元出身の労働者であり、出稼ぎの者ではない。学校やハンマーム（公衆浴場）などの生活インフラも整備される。

(3) その他全体概要

ウズベキスタンは、旧ソ連崩壊後、昨年9月に亡くなるまで25年間にわたりカリモフ大統領が治めてきた。独自の経済で国内市場を運営しており、パンなどの主食や交通費などは安く抑えられている。アフガニスタンとの国境を厳重に管理しており、イスラムのテロや麻薬などが入るのを封じている。

ロシア、アメリカ、中国とは均等外交を取っており、特定の国と強いつながりがあるわけではない。旧ソ連時代には飛行機の製造を行っていた国であり、教育水準は高く、自動車、家電製品、衣服、靴などで国産品が使われている。小学校4年、中学校5年、高校3年の12年間は義務教育であり、無料で受けられる。

日常会話はウズベク語だが、仕事ではロシア語を使うケースが多く、両方を使い分ける人が多い。

通貨は、スム。最高額の紙幣は5千スム札（約150円）なので、スーパーのレジでは、札束がやり取りされ、紙幣を数える機械が常備されている。

以上



建設現場では地元出身者を雇用



ヨーグルトは生活に欠かせない



パンは1個約30円（1000スム）



スペイン製の特急がタシケントとサマルカンド間340kmを2時間20分で結ぶ



タシケント市内の街並み